

衣装の発生と伝播

——背面意匠〈北方、西方〉を中心として——

今 木 加代子

はじめに

江馬 務によると、衣服発生の動機を以下の九つにわけている。

- 1 羞恥心満足説 2 貞操観念説 3 装飾説 4 標章説 5 異性索引説
6 保健説 7 護身説 8 儀礼説 9 魔障説

Costume；一揃いの衣服；衣装とは、広義には Castame；風俗；慣習をも含み持つもの、しかし我々日本人の衣生活は、明治維新を期に洋風化の道を辿って百有余年、skirt にしろ jupon にしろ余りにも当然なものになり、江馬 務の述べる、特に洋服発生の動機、Costume design の castame 的、或いは民族学的視点からの答は、未だ希薄なものと考えている。

しかしこれ迄、Korea の衣装、引いては〈垂領〉の発生源が、Shamanism の symbol 〈鳥〉に仮装している Shaman の呪衣の獣衣(写真 1)にあらう事を発見、当紀要の紙面でも、「服飾に見る呪的な問題について」と題し、特に意匠の多くが、Shamanism の思想に基づいた〈鳥〉への変身願望にあり、衣装発生の動機は魔障性最優先であることを解明して来た。又辞書には筆頭に宗教的小道具とある accessory の意が、明確に理解出来、生活文化は宗教に始まるとも、原始宗教 Shamanism は総べての宗教の原点と言われる所以も衣装を通して頷ける。

しかしこれらは「呪的な問題の究明を」と的確なテーマを御指導下さいました。故上村六郎先生の、90 年に及ぶ染織品への御深慮あればこそと、敬服の念を深めつつ。

当稿よりは「衣装の発生と伝播」と主題を改め、極寒の地の獣衣、又その呪衣に発生を見る衣装、特に意匠；accessorys の技を重視しつつ、その伝播を列举し、引いては大きく、具象例に乏しいとされる民族移動の痕跡迄も、察知出来るものに迄進展することを願い、探索を深めようとしている。

ウラル．アルタイ系の呪衣の意味するもの

「服飾デザインに見る呪的な問題について」とも多少重複を見るが、背面意匠の意味するものとして、再度記すこととする。

写真1 Tasikent 市の Uzbekitan 諸民族歴史博物館展示の Shaman の呪衣、写真2 Leningrad 民族学博物館展示の Shaman の呪衣の背面で、ウノ、ハルウアーは、その著「シャマニズム」(ウラル．アルタイ系の諸民族の世界象)で、Shamanism, 又その呪衣について詳しく述べている。

のろ鹿、マラル鹿、或いは羊の毛皮で作ってあって、明らかに大きな鳥の特徴を表している。袖下の縫合わせに沿って垂れているのは、〈鳥の風切羽〉を表していると民間では説明している。肩から垂れている皮や布の総も又〈つばさ〉と呼ばれていて、そこにふくろうの羽がつけてあることが多い。これらは死者の国の神秘的な動物と思われる蛇と同様である。又シャマンの腰の回りには金属の飾りと、貝を表した一種の赤い帯が縫いつけてある。頭は鳥の頭巾と言ひ驚みみずくの剥ぎ皮をそのまま被ることもあり、従ってアルタイのシャマンはこの装束をつけた時は、ただちに鳥の姿、それも一羽の驚みみずくの姿になったのは明らかである。¹⁾

と述べている。又ある民話の中に、

「…それからお前は山へ行って、クマ、オオカミ、ヤマネコの毛皮を剥ぎとり、帽子と服を作り、帽子には大樹からの角、服の胸と背中には鏡、帯には鈴をとりつけよ、それから手太鼓を作れ、それらはお前を守るであろう。また有力な精霊プルハンと鳥の精霊カオリがお前の守護者となるであろう」²⁾

とあり、又国立民族学博物館総合案内の解説によると、

「太鼓は強力な馬の役目を果たし、ばちは鞭の役割りを果たし、象徴化された鳥は神意をシャマンに伝える役割を持つ」又「礼冠を被り鈴や金具を縫い着けた重たい特別な衣装をまとう。そして太鼓を打ち鳴らし、身をうちふるわせながら、神がかりの状態になる。そこで人々に神意をつけたり、予言をしたり、病氣治療の祈祷をおこなった。」とある。³⁾

写真1 中央 Asia. Caspi 海の東, Uzubek 協和国の諸民族博物館に所蔵される呪衣は、まさしく上記条件を兼ね備えた実物であり、筆者はこれ迄これを、韓国民族衣装 Chima Cyogori の原形と述べ、pleats skert は尾を,⁴⁾ 袖は羽を arrange し又〈垂領〉“slit” の route とも記

してきた。⁵⁾

写真 2 は西部 Russia. Leningrad 民族学博物館所蔵の呪衣の背面で、〈つばさ〉と言われる、肩から垂れ下がる皮の総が圧巻であり、これこそが以後に述べようとする背面意匠の原形と見ている。これら Shaman の装束は、未だ科学的知識も乏しい原始の頃、Eurasia 大陸の中央 Aral. Altai 山麓の、一日に四季をみる寒暖差の厳しい環境の中で、動物の飼育を中心とした、住を定めぬ遊牧生活、護身のための衣の素材は先ずは獣の皮、accessorys は鳥の羽で、それらは、太陽を目刺しても飛ぶ〈鷹〉、闇夜も目を輝かせ 360 度視界のきく〈梟〉特に〈鷲みみずく〉の猛禽類が、人にも増して勇者の象徴とされている。

Shaman の呪衣とは、これらの皮を纏って鳥と化し、太鼓をたたいて勢いをつけるのか、大地と天空の間を自由に飛び交う鳥の如くに sham 演出・誤魔化し、神への使者・或いは伝達役を務め、村人の安穩、五穀豊饒を祈祷祈願していることになっている。

総べての宗教の原点とも言われる Shamanism, これら Shaman の呪衣こそが、衣の原形と解釈し、その背面に標章される〈鳥のつばさ〉が、如何に現代衣裳の背面に arrenge され、伝播しているかを列挙しつつ、引いては大きく Aral. Altai 山麓の遊牧文化、或いは森林草原文化を背景に展開したであろう衣裳が、どのように変化しつつ、今日の衣裳の基盤にあるかを模索、究明しようとする。

写真 3, 図 1 NORWAY, COPENHAGEN 国立博物館展示の子供の Coat で、小さな鳥の皮片が継がれ継がれて、子供をすっぽり包む〈大きな鳥〉と化した Coat と言える。袖口、脇の下、裾には鳥の羽そのままが使われており、Food の頭頂にだけ皮紐が数本ついている。又この〈鳥の精霊〉こそが、後々の帽子に、特に子供には護身の祈願を込め、必要欠かざる accessory であり、ここまで〈鳥〉そのものであろうとする Shamanism 的思想の伝播が、ここ北欧にあった証の感動の獣衣でもある。

写真 4 Urasia の大陸の最北東端、最も厳寒の地 Siberia, Yakut の呪衣の背面で宇宙の天体の太陽、月、大地を金属の円盤に変え、大きな三枚を胸元に、背面、の横に並ぶ九つの円盤、一つの環にぶらさがる三つの棒の集合は〈鳥の精霊〉金属の棒状を三本ずつ束ね、鳥の羽毛一枚一枚を象徴するもので、写真 2 の肩にも見られる。又衣の素材は裏皮が使われ、皮と錬金術で作られた背面意匠は、実に極寒の凍てつく tundra の地を背景とした〈鳥のつばさ〉の表現法と言えよう、そしてこの三本の金属の環が、如何に伝播するかをも注目して行きたい。

背面意匠の伝播と Ribbon の発生

写真 5 Aleutian Islands, Alaska の gown で、ここ Alaska では〈つめの鳥〉で作られた Gowne に、これ迄の金属と変わり、毛の房が数段に、そして袖上部に、又特に脇の下に多くの房〈つばさ〉が付いている。これら鳥の羽毛の新生は脇の下から生え変わるもの、写真 1 と同様に、袖口の小さい筒袖の形状に、脇の下が特に神聖視され、accessorys が最も多いことも今後の留意点ともなって来る。



極寒の地の鳥の羽毛で作られた子供の Coat の背面
(Copenhagen 国立博物館所蔵)

図 1



写真1 Uzbekitan 諸民族歴史博物館所蔵 (Tasikent) 草原のシルクロード展図録所載



写真2 Leningrad 民族学博物館所蔵 (RUSSIA)



写真3 Copenhagen 国立博物館所蔵 (NORWAY)



写真7 DIE MONGOLE 所載 (Mongolen) Pincuin



写真8 Budapest 民族学博物館所蔵 (HUNGARY)



写真9 Budapest 民族学博物館所蔵 (HUNGARY)



写真13 1991年8月著者撮影 (Lapland)



写真14 Qumper 郷土史博物館所蔵 (Bretagne)



写真15 Costumes de Bretagne 所蔵 (FRANCE)

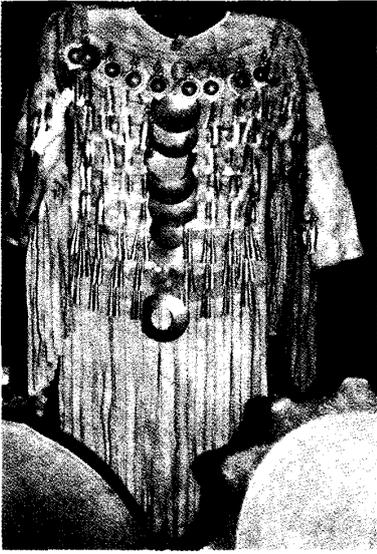


写真4 国立民族博物館(日本)所蔵
(Yakuts)

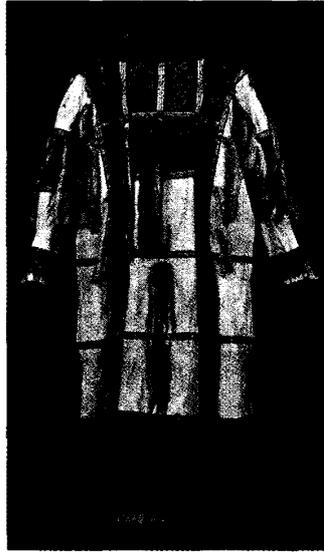


写真5 Aleutian Islands (post-card)



写真6 DANCING COLORS 所載
(AMERICAN) PATHS OF NATIVE
AMERICAN WOMEN



写真10 Budapest 民族学
博物館所蔵
(HUNGARY)



写真11 HUNGARY FOLK COSTUMES
AND EMBROIDERY 図録所載
(RUMANIA) 会場 大阪・ナンバ高
島屋



写真12 HUNGARY FOLK COSTUME
AND EMBROIDERY 図録所載
(RUMANIA) 会場 大阪・ナンバ
高島屋



写真16 National Museum 所蔵
(DENMARK)

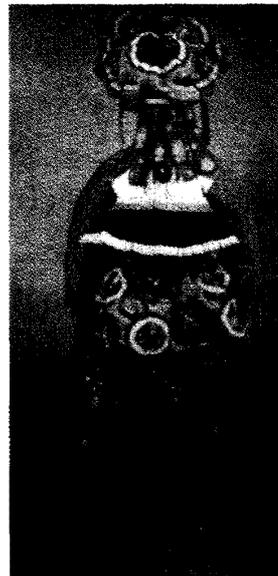


写真17 РУССКІЙ НАРОУДНИЙ
КОСТИОМ 所載 (RUSSIAN)

写真6 Alaska を経て Canada の Indian の背面には、写真4にも見る九つの円盤状が見られ、写真5とも同様に数段細い紐状にく鳥の羽毛が **arrang** され、袖口には房々と同じく細い紐状で風切羽が表現されている。素材は **buckskin** で少女用とあり、厳寒の地の子供の獣衣には護身を祈願し、**fringe** 房は必然的なものとなっている。

写真7 Urasia の中央、Mongolian の呪衣の背面で、これ迄の金属は無く、絹、綿等布の裁ち端そのままの金欄、緞子、チェックであったり、又こよりにしっかりと撚られたもの、毛皮の切れ端と、例え断片であっても、如何にも珍重視されたく鳥のつばさ〉が、梟の羽毛の冠に、30~40本取り付けられている。頭頂に林立する梟の羽毛は、後々冠に **arrange** され、伝播しているであろう事を、今後の課題ともしている。

写真8 HUNGARY Budapest 民俗博物館展示品で、今日では祭に現れる Shaman の呪衣のようで、Mongolu とも同じ様式で伝播していることが解る。何よりも、騎馬遊牧の民 Hun 族の築く国、繊維となる草木に乏しい遊牧生活の中で、房々と垂れ下がる背一杯の紐状の布きれば、思いの外貴重なもののようで、遊牧文化の〈晴〉の時を象徴する筆頭の **accessory** ともなっている。

写真9 写真8と同様 HUNGARY の、教会で挙式の景で、花嫁の頭飾りの環に太い帯のような豪華な **ribbon** が四本背に垂れている。

写真10 同じく男性の背にも黒の冠帽の後に、長々と床迄届く広幅の **ribbon** が四本垂れ下がっている。写真9、10共に Shaman の呪衣にみる〈つばさ〉の伝播と解釈出来、今日に見る **accessory** の **ribbon** も Shaman の〈鳥のつばさ〉の **arrange** となり、言い換えれば、**ribbon** をつけると鳥と化して、飛翔、飛天が叶い、天の神にも通ずる、正しく **ribbon**こそが、筆頭の神がかり的小道具、現代の装飾的意味を持つ **accessory** の始まりが、このような **ribbon** にあり、又 **ribbon** を付けるだけで〈晴〉を意味していることにもなってくる。

写真11 ここ東欧の RUMANIA では民族衣装にも、教会への盛装の頭装の後に多くの **ribbon** がひらめき、**skirt** にも **apron** にもつく **ribbon** は、やはり〈鳥の精霊〉として付けられていることになり、写真12 同じく RUMANIA でも時代が下ると、**ribbon** の帽子が、**wool** の地に薔薇の花で埋められた **scarf** に変わっている。又未婚者の **apron** には、華やかな **ribbon** が付き、既婚者の **apron** は **ribbon** があっても、地と同色の控えめなものであり、何処の国でも、若者には華麗にく鳥の精霊〉がついている。そして、ここ RUMANIA で Shamanism 的象徴の **ribbon** の頭装が、Christo 教の **symbol** 的薔薇の **skirt** に変わり、引いては教会に入る時には、被り物が必要とされる所以も、この当たりの伝播から察知も出来る。

写真13 北極圏 Lapp land Sami 族の民族衣装で、当紀要の紙面でも記しているが、かなり新しいもので、幅広の **ribbon** が背に縫いつけられている。そして、東西南北を現わす四角の帽子には、十本の **felt** の **ribbon** が、写真3・図1とも似て、後に纏めて付いている。

騎馬遊牧の民 Fun 族の西進は華々しく、Hungary の基礎を築き、更に Finland に及ぶもの、背面意匠がその移動の足跡を示すようで、冬期 Olympic で Finland の選手も、この Sami と同じ様式ながらも、背の **ribbon** は古来の呪衣の如くに揺れ動くものであった。

写真 14 Eurasia 大陸の最西端，西 Franse, Bretagne の背面であり，写真 3・図 1 にも見る如くに，頭頂に二本の ribbon，肩に二本，腰に三本と〈鳥のつばさ〉と〈鳥の尾〉を象徴していることになってくる。

写真 15 ここ海に面した Bretagne では，やがて白い布から，現在では民族衣装と云えば筆頭に登場し，又 Francais を象徴する，lace の Coiffes へと変わり，やはりブルーのリボンが頭頂にある。

写真 16 Scandinavia 半島，最南端 DENMARK に見る婚礼用の装束で，頭部をすばりと白布で被い，白い後裳に三本の ribbon〈鳥の尾〉がついている。ここ Denmark の地に，ここまで日本の十二単の後裳と同じ様式のあることに驚嘆の一枚でもあり，今後当主題のもと，婚礼の頭装の角かくし，綿帽子，weddingveil についても列挙し，究明の予定を持ってもいる。

写真 17 RUSSIAN の婚礼衣装で，写真 4 にも見る金属の円盤が，ribbon の片方を縫い縮めて大きな円を帽子に，小さな円を尚つなぎ，その先に ribbon がついて〈鳥の尾〉を arrange している。ここ RUSSIAN では全ての accessory が ribbon ともなっている。

“Ribbon” の語意について

かつて「話題源英語」の本発刊について，“Rein”〈手綱〉の語意説明の依頼があり，全く言語とは無関係の者と断わったものの再度の依頼に，下記のように“ribbon”とも関連する Shamanisme 的 accessorys；神がかり的小道具に，かかわるであろうことを記している。⁶⁾

“Rein”とは reindeer；トナカイとある如く，rein は手綱；制御，deer は鹿で，〈手綱〉のついたトナカイの引くソリは，白銀の大地で物資を運ぶ生活の足として，大きく生活を制御していることになり，又，クリスマス発祥の地とされる北欧の，トナカイのソリに幸を満載したサンタクロースが空を駆け，煙突から贈り物を入れる姿，その〈手綱〉は非常な主役で，過酷な風土を背景とするトナカイ遊牧生活の中の，天から授かる恩恵，Shamanism 的慰安の姿の演出とも云え，“ribbon”も又俗語に〈手綱〉ともある。

そこで，rein；雨と rain；手綱は，e と a が変わるだけで，何れも最も根源で生活を制御するもの，雨の如くに細い紐状のもので，天から光臨したもう神がかり的小道具となっている。〈鈴の尾〉〈しめ縄〉などに見る如く，〈綱〉は筆頭の accessory；宗教的小道具であり，天神が大地に降りる，掛け橋のような演出ともなっている。同様に rainbow は，雨の弧；〈虹〉であり，俗語に〈手綱〉とある“ribbon”は虹の arrange，虹の具象的表現と見られ，色とりどりであることが“ribbon”の条件とも云えよう。

写真 13 Sami の背面は，東西南北を象徴する四角の帽子に三原色の“ribbon”がつき，〈鳥のつばさ〉の ribbon と合間って，正しく ribbon, ribbon に包まれ，自在に宇宙遊泳可能な宗教的小道具が，しっかりと揃っていることにもなっている。そして又，line(綱；糸；線)，reil(手摺；欄干；鉄道)，rain(雨)，rein(手綱；制御)，ribbon(紐；帯；リボン)等と，神がかり的意を含み持つ，細く，長い線状が，ラ行の共通した単語となっていることが察せられる。

ま と め

今回の稿では、主として **Mongol** を中心に北方と西方への伝播を見ており、稿を改め東方、南方にも進める予定をしているもので、未修ながらも、

Alale. Altai 山麓にある呪衣の背面意匠の伝播を北、西に追い、これ迄感覚的に、単なる装飾としてしか考えられなかった“**ribbon**”が、誠に呪的祈願に富んで意味深く、大仰な言い方でも、宇宙の森羅万象を操る筆頭の神がかり的小道具であり、写真3の如くに、人の頭頂、背面には欠かせぬ **accessory** として、特に騎馬遊牧の民、**Fun** 族西進の後に顕著に見られる。

そしてやがて西 **France** の海岸地帯から〈白布〉に、そして“**lace**”へと移行していることが読み取れ、これらの背面意匠は、先ずは〈晴〉の象徴と云えよう。

そこで特に婚礼の綿帽子、角かくし、**weddingveil** の発生が今後の課題として非常に気掛かりなものともなて来る。

註

- 1) ウノ・ハルヴァ著「シャマニズム アルタイ系諸民族の世界象」三省堂
- 2) 加藤九祚「いちばん最初のシャーマン」月刊みんぱく 1980年3月 国立民族学博物館
- 3) 大塚和義「シャマニズムの世界」民族学博物館総合案内 国立民族学博物館
- 4) 今木加代子 服飾デザインに見る呪的な問題について—プリーツと尾のかかわりを中心として—帝塚山短期大学 紀要第30号
- 5) 今木加代子 衣装のルーツを求めて—コーリアンの衣装にシャマニズムを探る—日本服飾学会誌 第3号
- 6) 井上雍雄(編集代表) 話題源英語 心を揺する楽しい授業 東京法令出版株式会社

参考文献

- アンリ・ボグダン・高井通夫訳、東欧の歴史、中央公論社
- 護 雅夫、岡田英弘編、民族の世界史4 中央ユーラシアの世界、山川出版社
- 二宮宏之編、民族の世界史9 深層のヨーロッパ、山川出版社
- 森安達也編、民族の世界史10 スラブ民族と東欧ロシア、山川出版社
- 矢島文夫編、民族の世界史11 アフロアジアの民族と文化、山川出版社
- ゲルハルト・ヘルム著・関 楠生訳、古代ヨーロッパ先住民族 ケルト人、川出書房新社
- パムレーニ・エルヴィン編・田代文雄・鹿島正裕共訳、ハンガリー史、恒文社
- 田辺 保著、フランス文化の基層を求めて ブルターニュへの旅、朝日選書465
- グウィン・ジョーンズ著・笹田公明訳、ヴァイキングの歴史、恒文社
- アンリ・ピレンヌ著・増田四郎監修・中村 宏・佐々木克己訳、ヨーロッパ世界の誕生—マホメットとシャルルマーニュ—、創文社